

# 親鸞自筆『三帖和讃』から見た鎌倉時代漢語声調の一特徴 ——語構成に現れた非対称性——

石山 裕慈

## 1 問題の所在

日本語アクセント史研究においては、固有の日本語である和語については様々な研究が行われてきたが、反面、漢語に関しては必ずしも十分な研究が行われず、周辺的な地位に置かれてきた感がある。

四声の音価を推定するに当たって、金田一春彦（一〇〇一）第二編第四章では、現代京都語や補忘記などに現れた漢語のアクセントにも注目しているのだが、その後和語のアクセント史研究が目覚ましい発展を遂げたのと対照的に、漢語の方は研究が立ち後れているのが実情である。そのような中につて、注目される研究成果としては、次のようなものがある。

関しては、伝統的な日本吳音の声調に影響を受けていると考えられる<sup>(1)</sup>。

B 現代京都語において、伝統的な語と見なされる漢語のアクセントは、日本吳音の四声と、ある程度の対応関係が認められる<sup>(2)</sup>。

また、主に日本漢字音史研究の立場から、主に院政～鎌倉時代にかけての漢語声調、とりわけ吳音語の声調について、研究が行われてきた。その結果、過去の日本吳音において、以下のようない声調変化が発生したことが明らかになっている。本来日本吳音は「上声」を欠いていたが、この声調変化により、去声から上声が発生したとされる<sup>(3)</sup>。

A 平安時代における日常漢語のアクセント、特に語頭に

C 「上声—去声」「去声—上声」のようない「中低型」は回避され、「上声—上声」「去声—上声」という語形に変化

した。

D 和語の曲調（上昇調・下降調）アクセント消滅に伴い、「一音節去声」は上声に移行した。

その一方で、従来の漢語声調史研究は、事実上「二字漢語」に限られてきたという特徴がある。実際、漢語において最も一般的な語形は「二字一語」であるのだが、一方で漢字三字以上から成る語は無数に存在してきたのであり、二字漢語のみの考察では、漢語声調の日本語化を十分に把握できないことは言うまでもない。本稿では、三字以上の漢語が日本語アクセントの体系に組み込まれてゆく一過程について考察し、漢語声調史の一端を窺うことと試みる。

ここでは、まとまった用例が確保できること、および位相の面からも鎌倉時代の日常漢語のあり方をある程度反映していると思われる」と、などから親鸞自筆『三帖和讃』に注目し、そこに現れる三字以上の語の声調について、そのあり方を考察する。なお、本稿での分析は『親鸞聖人真蹟集成』三』（法藏館、一九七四）によることとし、用例の所在の表示も『親鸞聖人真蹟集成』のページ数によつて行う。

## 2 『三帖和讃』における漢語声調の概略

### ——二字漢語を題材に——

(平声—平声) : 異なり語数五八語、延べ語数八八語  
(平声—上声) : 異なり語数二〇語、延べ語数三二語  
(平声—去声) : 異なり語数二四語、延べ語数五八語  
(平声—入声) : 異なり語数三四語、延べ語数三四語  
(上声—平声) : 異なり語数一八語、延べ語数六二語  
(上声—上声) : 異なり語数三三語、延べ語数七二語  
(上声—去声) : 用例なし  
(上声—入声) : 異なり語数一〇語、延べ語数三〇語  
(去声—平声) : 異なり語数三二語、延べ語数五七語  
(去声—上声) : 異なり語数三四語、延べ語数四八語  
(去声—去声) : 用例なし  
(去声—入声) : 異なり語数一〇語、延べ語数一〇語  
(入声—平声) : 異なり語数二四語、延べ語数三五語

三字以上の語の検討に入る前に、三帖和讃に出現する二字漢語声調の概略を整理しておきたい。二字漢語については研究の蓄積がある上に、前述のように漢字二字の語が、漢語として最も基本的な姿と目されるからである。二字漢語の素描を終えた上で、次節以降、本題である三字以上の漢語の考察を試みる。

『三帖和讃』は基本的に平声・上声・去声・入声の四声体系である。声点は四種類で二字漢語ということになると、理論上は四×四で一六通りの声調が存することになるが、実際の出現数は、以下のようになつてている。

(入声—上声) : 異なり語数七語、延べ語数一〇語

(入声—去声) : 異なり語数一〇語、延べ語数三〇語

(入声—入声) : 異なり語数四語、延べ語数六語

この他、平声軽・入声軽と思われる字を含む一字漢語は、以下の通りである。

異香、一切、君子、至徳、承久、攝取、嘆詮、勅宣、天子、天地、得失、德本、汾州、并州

この資料には「平声軽」「入声軽」が現れるといつても、限られた場合にしか現れないことが分かる。そのため、本稿では軽声については考察の対象から除外し、四声のみを考えることとする。

まず気付くことは、「上声—去声」「去声—上声」という組み合せが一つも見られないことである。遅くとも平安時代後期には、日本呂音においては「上声—去声」「去声—去声」のような中低型が回避され、「上声—上声」「去声—上声」のような変化が起こっていたとされるが、ここではその傾向が如実に表れているといふことができる。

次に、鎌倉時代には「一音節去声字の上声化」という現象も認められるのだった。そこで、振り仮名がついていて音節数が判別できる上声・去声字を列举すると、次のようになる。後の

考査の便宜のため、一字目（語頭）・二字目（語中・語尾）に分けて挙例する。なお、当該字には傍線を付し、複数回表れる語については出現数を括弧で示した。また、二字目に関しては、直前の字の声調も考慮する必要があるため、二字目上声については、直前の字により分類を行った。

### ① 一字目

(一音節上声)

依正、機縁(一)、疑晴、<sup>ノ</sup>疑謗、功徳(五)、恭敬(一)、九方、弘願、<sup>ノ</sup>弘誓(二)、<sup>ノ</sup>帰敬、<sup>ノ</sup>帰命(四)、<sup>ノ</sup>寤寐、死骸、志願、師主、至徳、慈恩、慈光、慈悲、差別、娑婆、<sup>ノ</sup>宗師、修行、衆惡、衆生(六)、衆善、諸有(三)、諸善、諸相、諸相、諸仏(五)、諸來、素懷、他力、知識、頭陀、頭面、悲願、不退、菩薩(五)、菩提(二)、弥陀(三)、弥勒、無碍、無碍、無常、無數(三)、無道、無<sup>ノ</sup>明(一)、無量(三)、無漏、離相、流転、威光、韋提、回入、回向、廻向

(二音節上声) : 用例なし

(一音節去声)

歌嘆、弘願、弘誓(三)、虛空、邪見、他方、他力、通入(二)

安養 (一)、安樂、因地 (一)、曠芳、曠發 音声、恩愛、香氣、經  
 道、輕微、光耀、光暎、光顏、光照、光明 (五)、光輪  
 (二)、還帰、還相、群生、恒沙、金剛 (一)、金色、西路、最  
 後、相應、生死 (二)、莊嚴 (一)、稱名、清淨、真宗 (二)、真  
 如、真門、瞋怒、神光、誓願、照耀、專修 (一)、專雜、專精、尊  
 重、難易、拝見 (一)、方便 (四)、万川、辺際、凡愚、凡衆、凡  
 地、凡夫、煩惱 (三)、名号、名願、遺教、遺法、童宮、憐

願海、苦海、智海、宝海、仙經、濁水、七重  
 光耀、照耀、機緣 (一)、相應、慈恩、死骸、金剛 (一)、修行、  
 竜宮、威光、慈光、神光、光暎、光顏、莊嚴 (一)、群生、  
 衆生 (六)、音声、疑晴、專精、無常、光照、菩提 (二)、  
 韋提、九方、他方、稱名、光明 (五)、無明 (二)、真門、  
 安養 (一)、諸來 光輪 (三)

## ② 二字目

### (一 音節上声)

i 平声・入声に後続するもの

積迦 (五)、比丘、山家、鸞師 (四)、雜修 (四)、利他、信知、  
 勝地、寶池、執持、一如、大悲 (三)、有無 (二)、自余、厭離、  
 出離、道路、小路

ii 上声・去声に後続するもの

(一 音節去声)  
 源空 (二)、命終  
 宿因、有緣 (二)、強縁、化縁 (一)、雜縁、大恩、仏恩 (四)、  
 普賢 (二)、逆心、一乘、誕生、女身、仏身、法身、穢身、  
 果遂 (一)、世尊 (一)、阿難 (一)、自然 (三)、涅槃 (四)、  
 誦文、要門 (一)、仮門、所聞、闍王 (一)

難易、虛空、凡愚、還帰、宗師、恒沙、真宗 (二)、專修 (二)、  
 頭陀、弥陀 (三)、三塗 (一)、真如、瞋怒、娑婆、慈悲、凡夫、  
 輕微、西路

これを見ると、一音節字の多くが上声になつてていることが分かること。院政期を境に、和語の上昇調音節が消滅したのと軌を一にして、本来去声だった字のうち、一音節のものは上声になる一方、二音節のものは原則として去声にとどまり、時代を経るに従つて「一音節=上声」「二音節=去声」に固定していった

i 平声・入声に後続するもの

### (一 音節上声)

とされるが<sup>(4)</sup>、この資料ではそのような傾向は認められるものの、まだ例外も多く、過渡期の姿を示している。

その一方で、漢字が立っている位置によつて、上声化傾向に差があるようにも思われる。すなわち、同じ一音節去声字でも、一文字目だと去声にとどまりやすい反面、二文字目だと直前の字の声調に関係なく上声化する傾向が強いように思われるし、その一方で、二音節字で平声・入声に後続するにも関わらず、去声ではなく上声になつてゐる用例が多いよう見えるが、実際のところはどうだろうか。

まず、一字目における上声・去声の分布と音節数との関係を表にまとめる、次のようになる。

当該字	音節数	一音節	二音節
上 声		8 9 (5 6)	0 (0)
去 声		1 1 (8)	7 4 (5 6)

※上段は延べ語数、下段括弧内は異

なり語数を表す。2字目の表でも同様。

去声字のうち、「一音節である」「上声・去声に続く」の少ない一方を満たした場合に限り、上声が現れるとされていることを考え合わせると、一字目の場合、理論上は「一音節＝上声」「二音節＝去声」という色分けが成り立ち、表中で太線で囲つた部分だけに分布するはずであるが、少數ながら「一音節「他力」は「一音節上声」にも挙げられている例であることがら、これらは一音節去声字が上声化する途上にあるものと見られるし、また、「虚」については、「虚<sup>フ</sup>無<sup>モ</sup>之<sup>ミ</sup>身<sup>ジン</sup>」（淨土和讃・三一ページ）のような例があり、これも上声に移行しつつあつた様子が見て取れる。そのため、大多数の用例が太線の箇所に集中していることも考え合わせると、一字目に関するのは「一音節去声字の上声化はほぼ完了しており、原則的に一音節だと上声、二音節だと去声が立つた」状態であるということができるよう<sup>(5)</sup>。

次に、二字目に関して、上声・去声の分布をまとめる、次の表のようになる。なお、前述の如く、去声字の前には平声・入声字しか立たないため、この場合分けが必要なのは上声字に限られる。

無量寿經註』などを分析した佐々木勇（一九八七a）が、一音節去声字の上声化について、学説を出している。それによると、全ての「一音節去声字」が一音に上声化したわけではなく、字の位置によってばらつきが認められ、

## 2字目

		音節数	一音節	二音節
		当該字 前節字		
上 声	平声・入声	3 1 (1 8)	7 (7)	
	上声・去声	2 3 (1 8)	5 0 (3 3)	
	去 声	平声・入声 (2)	3 (2)	4 2 (2 5)

「」でも、先ほどと同様、原則論で言えば「一音節・上声」「一音節・去声」が出現するという色分けが成り立つはずである。すなわち、太線で囲った箇所に用例が固まることが推測される。それでも、やはり「一音節去声」（平声・入声に後続する）「一音節上声」という例外が出現していることが注目される。以下、このような例が出現した原因について、場合分けして検討を加える。

まず、「一音節去声」であるが、これは語頭・語中に関わりなく出現していたものだった。もつとも、「一音節去声」は絶対数が少ない上に、うち二例が固有名詞（人名）の「源空」であり、「二字目の一音節去声」に比べて明らかに少ないという特徴がある。

『三帖和讃』の分析結果ではないのだが、同じ親鸞自筆『觀

という順序で「一音節去声字の上声化」が進んだとする（e）。

実際、三帖和讃の例について見ると、「二字目・一音節去声字」である「弘願」「弘誓」「虚空」「慈悲」「他力」の各字は、「二字目・一音節上声字」にも出現しており、一音節去声字が上声に移行する過程を映し出しているものと考えられる。

一方、二字目に関して特筆されることは、「二音節上声」が多く現れていることである。すなわち、二字目については、（二字漢語の範囲においては）二音節上声が出現しないのに対し、二字目では、上声・去声に後続する場合はもとより、平声・入声に後続する場合であっても、七例が二音節上声として出現している。本来ならば去声にとどまるはずの、平声・入声に後続する二音節字であっても、上声になる場合が多いことが注目される。

『三帖和讃』に限らず、二字目よりも二字目の方が、（直前

の字の声調とは一応無関係に)「二音節上声が現れやすい」ということが、先行研究においても指摘されている(2)。この原因についてはいまだ定説を見ないのが現状であるが(3)、ひとまず、この節で得られた結論を箇条書きにすると、次のようになる。

- ①二帖和讃では、本来去声字だったと思われる字も、原則として「一音節字は上声に、二音節字は去声になつて」いる。  
②やや例外的と目される、「一音節去声」「二音節上声」も存在する。両者とも、語頭にも語中にも出現するが、一音節去声字は語中よりも語頭に、二音節上声字は語頭よりも語中に現れやすいという傾向がある。

- ③『三帖和讃』に出現する二字漢語の声調は、從来指摘されている鎌倉時代の漢語声調の傾向に沿つたものである。

### 3 二字漢語の声調について

前節でも見たように、二字漢語の声調に関しては、從来の研究によつて多くの事実が明らかにされており、『三帖和讃』に關してもそれに対するものではないことが確認された。一方で、従来の考察の範囲は、事實上「二字漢語」とどまつており、三字以上の語についてはほとんど手を付けられていないのが現状であるようと思われる。本節では『三帖和讃』に出現する三

字漢語の声調を分析し、そこにはどのような特徴が現れているか、分析を試みたい。

まず、『三帖和讃』に出現する三字漢語のうち、三文字全てに声点が加えられている語とその声調を出現順に列挙すると、後掲の別表のようになる。以下、用例の引用に当たつては、別表中の通し番号によることにする。

前節で検討したのと同様、ここでも「一音節去声」が基本的に見られないという特徴がある。しかし、その一方で、二字漢語の場合には絶えず見られなかつた、「中低型」の用例が数多く出現していることに気付く。具体的には、3、16、36、37、40、42、57、60、61、66、72、84、97、98、109、120の各例である。このよくな用例をどのように解釈すべきだろうか。

ここで注目されるのは、「中低型」であるといつても、そこにある種の秩序が見られる」とことである。すなわち、79は「非十人天」という具合に「二字十一字」という語構成の熟語であり、それ以外は57「金剛十心」など「二字十一字」の語構成になつていると考えられるのだが、意味上一まとまりである「人天」「金剛」などについて見ると中低型が現れていないといふことである。「人天」「金剛」の場合は「去声—上声」となつており、前節で検討した声調変化を経ていると考えられる。このような「意味上のまとまりの中において中低型を回避した例」は他にもあり、8、14、24、45、58、70、73、88、89、90、91、92、106、116などがこれに当てはまると思われる。

その一方で、境界をまたいで「去声→上声」の変化を経ており、三字漢語全体で中低型が解消されていると思われる用例があることも見逃せない。具体的には9、25、49、59、70、78、90、91、92、112、116の各例である。「のうち9、25、70などは、厳密に言えばそれぞれ「聞十光力」「已十今十当」「金十光明」といった語構成であると考えられるのだが、三字全体での使用が多いために、語構成が無視され、三字で一まとまりになつたのであろうと考えられる。

また、90・91「金剛心」は、先ほど別に「中低型」が現れている語形としても挙例した例であり、二様の声調が出現しているということになるが、これは全体で一まとまりになるに至る過渡期の状態にあるものと考えられる。ともあれ、二字漢語がそうであったように、三字漢語の場合も、去声字が上声化するなどして、中低型を回避する方向にあつたという傾向が認められる。

ところで、前節で指摘したように、『三帖和讀』の二字漢語では、語頭よりも語中に二音節上声字が現れやすく、しかもそれは直前の字の声調に関係なく起こる現象であった。三字漢語の場合も、同様の現象が発生していることが分かる。例えば3などは、「遇十斯光」という語構成であると考えられるのだが、「斯」という平声字に後続するにも関わらず、二音節字の「光」が上声になつていて、

その一方で、境界をまたいで「二音節上声字」が出現してい

ると思われる例が存することも指摘できる。36、37、40、42、46、66、72、84、97、98、111、114の各例は、直前に語構成上の境界があり、しかも直前が平声・入声字であり、さらに二音節字であるにも関わらず、上声化を起してい。もっとも、その一方で、同じ条件下の22、56、60、61、109は去声にとどまつており、語彙的な要因に左右されるようではある。

境界の直後に当たる箇所に、本来語頭には現れにくい「二音節上声字」が出現していることは、その部分の独立性が低くなつていて、右の二つの変化は、三字以上の全ての語について発生しているわけではなく、偏りがあるようである。先程のよ

うな上声化例がある反面、語構成が判然とするものだけでも、6、14、16、22、56、57、60、61、106、109の各例は、語構成上の境界の直後の字が去声のままである。語形によって、前述のような変化の発生のしやすさに違いがあるのだろうか。

漢語の中で最も一般的な語形は、二字で一語になつていてのであり、そうすると三字漢語の場合、「二字十一字」「二字十一字」という組み合わせの語が多いと考えられる。実際、『三帖和讀』の三字漢語も、「二字十一字十一字」三字全体で一形

「態素」という語形はあまり現れず、「二字十一字」「二字十二字」型が多くなっている。この両者について、語構成上の境界直後における、「二音節字の上声化の有無を調べると、以下のようになる。

まず、「二字十一字型」の場合は、上声化しているものは4、37、40、42、46、49、59、66、72、78、84、90、91、92、97、98、111、112、114、116の二〇例（異なり語数では一六例）であるのに對し、去声にとどまっているものは57、60、61、109の四例である。

一方、「二字十二字型」は、上声化しているものが9、70の二例であるのに対し、6、14、16、22、56、106の六例（異なり語数では五例）は去声にとどまっていることから、「二字十一字型」の場合は後項の二音節去声字が上声になりやすく、「反面」二字十二字型だと後項の一字目が去声にとどまりやすいという傾向が見て取れる。付言すると、同じ字（例えば「心」）でも、前者だと上声になりやすく、後者だと去声にとどまりやすいという傾向を示しており、「二字十一字型」の漢語の後項に、偶然上声化しやすい字が集中しているというわけでもなさそうである。

この非対称性を解く手がかりが、四字漢語、とりわけ「二字十二字」型の語構成の熟語にあるように思われる。四字漢語の中で最も多い語形は、「二字十二字」という組み合わせのものである。漢語の中で最も基本的な語形が二字の熟語であることを考へると、それが二つ合わさった「二字十二字」という組み

合わせが多くなることも首肯されるところである。

二字・三字の漢語でも見られたような現象は、四字漢語でも見られる。すなわち、四字全体では中低型が頻出するものの、前部要素・後部要素内に注目すると、中低型が回避されていることや、直前の字に關係なく「二音節上声」が出現すること、

「一音節去声字があまり見られない」と、などである。

前述の如く、境界の直後に二音節上声が現れるか否かが、その語の複合度を測る目安になると考えられるのだが、「二字十二字」型の場合、後項の一字目（全体の三文字目）に二音節上声が現れていることが極めて少ないことが分かる。すなわち、後項の一文字目が二音節であるもののうち、去声にとどまっているものが四五例なのに對し、上声化している例は「女人成仏（平去上入）」「念佛三昧（平入上平、二例）」「變成男子（平去上平）」の延べ四例に過ぎない。ちょうど、三字漢語の二字上一字の場合と同様の傾向を示していことが分かる<sup>(9)</sup>。

このような傾向が現れる最大の原因是、「二字漢語」が漢語の中で最も基本的な単位であり、従つて安定度も高かつたことによるところと考えられる。すなわち、三字漢語で二字十二字型の場合、後項は安定度の高い二字漢語であるために独立性を維持しやすく、逆に二字十二字型の語構成の場合には、後項はより不安定な型である「二字」という語形であることから、独立性を失つて複合度の高い三字漢語を形成することが多かつたと考えられるのである。

ここまでではもっぱら『三帖和讃』について見てきたが、以上のような傾向は、三帖和讃のみに見られるものではない。時代・位相の面で三帖和讃に近いと思われる、妙一記念館本『仮名書き法華經』に現れる漢語の例を、最後に若干触れておく。

まず、語全体で見ると、「中低型」と言える用例が多数存在する。非法声（上入上）、愁嘆声（去平上）、童女声（去平上）、増上慢（去平去／平）などである。なお、この四例に関しては、左側にそれぞれ「のりにあらざる」ゑ」「をんな」ゑ」「うれなげく」ゑ」「いまたえざるをえたりとおもふもの」とあるため、三文字で一語という意識はあつたものと考えられる。

しかし、「声」の例しかない憾みはあるが、非法声、愁嘆声、童女声に関しては、それぞれ「非法十声」「愁嘆十声」「童女十声」という語構成であるにも関わらず、後項の「声」が上声になつており、「声」の独立性が弱くなつていることを反映していると考えられる。また、別の箇所で「増上慢」に「去平上」が差声されている例もあり、搖れが認められる点が注意される。また、「二字十二字」型の四字漢語において、後項の一字目に二音節去声が現れる語が、伶俜辛苦（さすらひくるしむ、平平去平）、志念堅固（こころさしおもひかたから、平上去平）、羸瘦憔悴（つかれやせかしかむ、平上去平）、勤加精進（つとめすすめ、平上去平）、面貌

円満（おもてかたまとかにして、平去去平）、膚色充潔（はたへいろみちきらきらし、平入去入）、多病瘠瘦（やまひおほくかしけやせ、上平去平）、窮子歎喜（まつしきによるこひ、上平去平）、諸子幼稚（もろもろのこいとけなく、上平去平）、持戒清潔（かいをたもちいさきよき、上平去入）、思惟校計（おもひはかりかそへ、上上平）、多聞強識（おほくきくこわきさとり、上上平）、災火蔓延（わさわひのひはひる、去平去入）、金銀珍宝（こかねしろかねたから、去上去平）、水腫乾癟（みつぶくれかれやまひ、去上去上）、唯翫暉吠（いかみほゆ、去上去入）、愍念安樂（あわれみおもひ、去入去入）、形容憔悴（かたちいろかしかめ、去入去入）、宝樹莊嚴（ほたいしゆをかさりて、入平去上）、宝縛絞絡（たからのなわをまついて、入去去入）、質直柔軟（すなをやはらか、入入去平）、宿福深厚（むかしのふくふかくあつく、入入去平）、骨肉狼藉（ほねしむらみたれかはし、入入去入）であるのに対し、同じ条件下で後項の一字目に二音節上声が現れる語は、勤修精進（つとめすすむ、平上上入）にすぎない。このことからも、「二字漢語」の安定性が知られるのである。

#### 4 結論

本稿の結論を箇条書きにすると、次のようになる。

①鎌倉時代語においては、二音節字が上声になることがあつた。これは直前の字の声調に關係なく起り、また、語頭より語中において顯著に見られる。このことは、漢語の熟合度に關わつていてると考えられる。

②從来指摘されてきた二字漢語の他、三字漢語においても、

三字全体で一語と把握されつゝあつた変化が見て取れる。この傾向は、「二字+一字」型の方が、「一字+二字」型よりも強く表れており、前者の方が早く一語としてまとまりたと考えられる。

③このような非対称性が生じる原因是、「二字漢語」が漢語の中で最も基本的な姿であることによると考えられる。

すなわち、一字十二字型は、後項が二字漢語であるため、後項の独立性・安定性が高く、先行する一字と熟合する」とも少なかつた。逆に、二字+一字型は、後項が一字漢語

で独立性も弱く、より三字漢語として結合度の高い語形になり得た。

④ただし、三字全体で見ると、二字漢語では現れない「中低型」が許容されるなど、二字漢語に比べると熟語としての熟合度は低いと言える。

にもつながっているのか、また、多くの言語で見られる「枝分かれ構造」の一環として捉えられるものなど、残された課題が多いのだが、今後の考察を期したい。

#### 〔注〕

(1) 沼本克明(一九八一)第一部第五章第二節による。

(2) 前述金田一氏論考、および奥村三雄(一九六一)など。

(3) 日本吳音における「上声」が、去声から派生したらしいことについては、奥村三雄(一九六一b)などに言及がある。また、日本吳音に上声を欠く原因に関しては、中国語原音レベルの問題を想定する学説が沼本克明(一九八一)第一部第六章第一節によつて出されている。

(4) このあたりの歴史的事実については、沼本克明(一九八六)などによる。

(5) なお、「音節去声字」として出現している字に、「空」や「弘」など、本来ヨ韻尾を持つ字が多いことも注目される。この場合「-g」が無表記になつてゐるだけで實際は二音節相當だった、などといった事情も想定されるのだが、『三帖和讃』では入声字に緩急の区別が見られないなど、漢字音に関しては字音直読資料ほどの厳密さを伴わない位相の文献だったと見られることなどから(佐々木勇(一〇〇〇)など参照)、本稿では仮名の表記と實際の音節数とが相当程度対応していると考えることにする。

本稿では『三帖和讃』における三字漢語に注目し、考察を行つたため、現代語のアクセントなどといった、他の言語事実からの論及はできなかつた。本稿で考察した事象が現代語

(6) なお、ここでいう「句」とは、切点に挟まれた數文字のことを指

し、「語」と「句」の中をさらに細分化し、意味的にまとまつてゐる一単位のことを指している。

(7) 沼本克明（一九九七）第一部第三章など。

(8) 管見に入ったものとしては、以下のような仮説が出されているようである。まず高松政雄（一九八一）は、上声・去声に後続する去声が上声に変化するなどの、現実における上声の勢力の強さに由来すると考え、加えて語中は語頭に比べ緊張が弛緩しがちであること、去声（上昇調）は発音上の負担が高いこと、なども考慮している。また、榎木久薰（一九九一）は、ある字が上声化することが多い場合に、その字の本来の声調が上声であると誤認された可能性を想定している。その一方で、語尾にヨ・ロ・ロ（も含む）を持つ二音節字が、語中においては一音節の如くに把握されたことを想定する、佐々木勇（一九八七b）の説もある。

(9) 去声にとどまつてゐる四五例のうち、平声・入声に後続するものがのべ三一例、上声・去声に後続するものがのべ一三例、不明一例（直前字に差声なし）となつていて。このように、二字十二字型四字漢語の後項の一字目は、直前の声調に関わらず去声が多く現れています。

——（一九六一b）「吳音声調の一性格」『訓点語と訓点資料』一八

金田 春彦（一〇〇一）『日本語音韻音調史の研究』（吉川弘文館）

佐々木 勇（一九八七a）「吳音一音節去声字の上声化の過程」『鎌倉時代語研究』一〇

——（一九八七b）「吳音二音節去声字に対する上声点加点例について」『国文学攷』一一三

——（一〇〇〇）「鎌倉時代における舌内入聲音の諸相」『鎌倉時代語研究』一三

高松 政雄（一九八一）「吳音上声点」『国語国文』五〇一八

沼本 克明（一九八二）「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」（武藏野書院）

——（一九八六）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）

——（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究』（汲古書院）

（いしやま・ゆうじ 大学院人文社会系研究科 博士課程一年）

## 参考文献

榎木 久薰（一九九一）「光明真言土沙勸信記における声調変化について――吳音去声字の上声化についての考察――」『鎌倉時代語研究』一四

奥村 三雄（一九六一a）「漢語のアクセント」『国語国文』二〇一

## 別表

(注)

- 1) 声点は、四声の頭文字で表記した。
- 2) 各「語」の文字列は、同位置の「声点」の文字列と対応している。  
例えば、1 「平等覺～去平入」の場合は、「平」に去声、「等」に平声、「覺」には入声が差声されている意である。
- 3) 94 「玄忠寺」は、「玄」に平声と去声が差声されており、「忠」「寺」にそれぞれ平声が差声されていることを表す。
- 4) 「所在」は、「親鸞聖人真蹟集成」によった。例えば「高僧20」とあれば、「浄土高僧和讃」の20ページに記載されている。

番号	語	声点	所在	番号	語	声点	所在
1	平等覺	去平入	浄土 13	33	究竟願	平平平	浄土 46
2	難思議	去上上	浄土 14	34	不思議	上上上	浄土 46
3	遇斯光	去平上	浄土 15	35	真無量	去上平	浄土 46
4	畢竟依	入平上	浄土 15	36	微妙音	上平上	浄土 47
5	最第一	去平入	浄土 16	37	清淨勲	去平上	浄土 49
6	大應供	平去平	浄土 16	38	不思議	上上上	浄土 53
7	大安慰	平平平	浄土 18	39	功德藏	上入平	浄土 53
8	三乘衆	去上平	浄土 19	40	無極尊	上平上	浄土 54
9	聞光力	去上入	浄土 20	41	不思議	上上上	浄土 55
10	心不斷	去上平	浄土 20	42	無碍人	上平上	浄土 56
11	無等等	上平平	浄土 23	43	慶所聞	平平去	浄土 57
12	広大会	平平平	浄土 24	44	未曾見	平去平	浄土 63
13	大菩薩	平上入	浄土 25	45	饒王仏	去上入	浄土 68
14	大心海	平去上	浄土 26	46	智慧光	平平上	浄土 69
15	不思議	上上上	浄土 29	47	不思議	上上上	浄土 70
16	非人天	上去上	浄土 31	48	不思議	上上上	浄土 72
17	無極体	上入平	浄土 31	49	弥陀經	上上上	浄土 77
18	平等力	去平入	浄土 31	50	不思議	上上上	浄土 79
19	安樂國	去入入	浄土 32	51	無量劫	上平入	浄土 80
20	正定聚	平平平	浄土 32	52	善知識	平上入	浄土 81
21	不定聚	上平平	浄土 32	53	行雨等	平上平	浄土 92
22	大心力	平去入	浄土 35	54	富樓那	上上上	浄土 92
23	大弁才	平平去	浄土 36	55	阿弥陀	上上上	浄土 97
24	無称仏	上上入	浄土 36	56	極難信	入去平	浄土 99
25	已今當	平去上	浄土 37	57	金剛心	去上去	浄土 100
26	不可計	上平平	浄土 37	58	安養界	去上平	浄土 103
27	阿彌陀	上上上	浄土 40	59	迦耶城	去上上	浄土 104
28	菩薩衆	上入平	浄土 42	60	無眼人	上平去	浄土 106
29	婆伽婆	平上上	浄土 42	61	無耳人	上平去	浄土 106
30	道場樹	平去平	浄土 43	62	無上上	上平平	浄土 107
31	超數限	去上平	浄土 44	63	真解脱	去平入	浄土 107
32	大根受	平入平	浄土 44	64	真解脱	去平入	浄土 107

番号	語	声点	所在	
65	真解脱	去平入	淨土	107
66	平等心	去平上	淨土	108
67	一子地	入平平	淨土	108
68	一子地	入平平	淨土	108
69	大信心	平平去	淨土	110
70	金光明	去上上	淨土	113
71	寿量品	平平平	淨土	113
72	他化天	去平上	淨土	120
73	大魔王	平上上	淨土	120
74	阿弥陀	上上上	淨土	122
75	善鬼神	平平去	淨土	123
76	惡鬼神	入平去	淨土	124
77	十二劫	入平入	淨土	127
78	染香人	平去上	淨土	130
79	娑婆界	上上平	淨土	131
80	南天竺	去上入	高僧	6
81	歡喜地	去平平	高僧	7
82	無量劫	上平入	高僧	13
83	本願力	平平入	高僧	18
84	無碍光	上平上	高僧	21
85	本願力	平平入	高僧	21
86	尽十方	平入去	高僧	22
87	願作仏	平平入	高僧	23
88	度衆生	平上上	高僧	23
89	度衆生	平上上	高僧	23
90	金剛心	去上上	高僧	24
91	金剛心	去上上	高僧	24
92	菩提心	上上上	高僧	24
93	大嚴寺	去平平	高僧	32
94	玄忠寺	去/平平平	高僧	34
95	不思議	上上上	高僧	39
96	尽十方	平入去	高僧	44
97	無碍光	上平上	高僧	44
98	無碍光	上平上	高僧	45
99	不思議	上上上	高僧	47
100	尽十方	平入去	高僧	48
101	身口意	去平平	高僧	50
102	念相繞	平去入	高僧	57
103	念相繞	平去入	高僧	57
104	蠻菩薩	平上入	高僧	60
105	綽和尚	入平去	高僧	65
106	大心海	平去上	高僧	70
107	仏法力	入入入	高僧	79
108	不思議	上上上	高僧	79
109	增上緣	去平去	高僧	79
110	本願力	平平入	高僧	81

番号	語	声点	所在	
111	五濁增	平入上	高僧	91
112	廻胎經	平去上	高僧	100
113	懈慢界	平去平	高僧	100
114	智慧光	平平上	高僧	109
115	綽和尚	入平去	高僧	115
116	声聞僧	去上上	高僧	122
117	念佛宗	平入上	高僧	123
118	等正覺	平平入	正像末	4
119	無上覺	上平入	正像末	5
120	不可稱	上平去	正像末	8
121	不可說	上平入	正像末	8
122	大師等	平上平	正像末	11